

ある晴れた日、木々が生い茂る中を進むと木の葉を抜けた日の光が雨のように差し込む様子に出会う

ひとはこれを「木漏れ日」とよぶ

私の表面にはまばらな模様ができ、私の動きに呼応するようにその形はみるみるうちに変化してゆく

移り変わる空間に私たちは不思議と違和感を感じず、ある種の心地よさをおぼえる

このように、なにかの隙間を縫うような光とそれが作り出す空間を「溜まり日 (tamariibi)」と呼ぶことにしよう

溜まり日

この空間は、純粋な溜まり日を表現するものである

様々に設けられた段差と規則的な柱割は、人々が自分の心地よい場所をみつける手助けとなる

日々は目まぐるしく流転する

その一瞬はこの空間に溜まり続け、私たちを柔らかに包み込む

溜まり日の中で人々は周囲を忘れ、各々の時間を獲得してゆく

